# 文化の交差点

*bunka to bunka no kousaten*

2021年稲刈号

## contents


**サークル見聞録**

劇団木霊新人公演「犀臨」　ｐ１

演劇研究会企画公演「宗門改めである!」　ｐ２

国際問題研究会早稲田祭研究展示　ｐ３

**文化の案内板**

マンドリン楽部　ｐ４

演劇研究会／舞台美術研究会　ｐ５



「文化の交差点」2021年稲刈号

発行日:11月19日

発行者:「文化の交差点」編集委員会

代表・神原（教育3年）



連絡先:090-2331-4456

waseda-bunren@hotmail.co.jp

サークル見聞録

# 劇団木霊2021年新人公演『犀臨』

（9月17～20日　生配信）

公演からだいぶ日が経ちますが、ぜひ感想を書きたいと思います。

舞台は人間の機械化が進む社会。そこで暮らす生身の人間・タカホと、体の一部がサイボーグ化されたタイガ、そして生まれた時から機械のキヨスケ。境遇が異なる３者の視点が激しく交差する様子が、とても面白く目が離せませんでした。

とくに印象的だったのは、体の一部がサイボーグであると判明したタイガが、完全な機械に改造されてしまう場面。それまで人間でいるべきか葛藤していた彼が突然、「すっきりした」と何事もなかったように語る姿に、私はショックを受けました。

友人の変わり果てた姿に意気消沈するタカホ……しかし機械であるはずのキヨスケが、そんな彼に熱く語りかけます。キヨスケのはたらきかけで人間として生きる道を選んだタカホの瞳には、力強さが宿っていたと思います。

「機械化」の儀式が生々しく描かれることによって、人間が持つ意志や感情の尊さが逆に浮き彫りにされる、そんな公演でした。舞台美術も良かったです。（楓）

## 早稲田大学演劇研究会　企画公演
# 「宗門改めである!」
10月24日（日）～11月21日（日）配信

早大劇研による半年ぶりの企画公演「宗門改めである！」を観た。キリシタンの禁圧をめぐる・とある村の人びとのお話を、コミカルに描いた時代劇である。ワッセド国・トッコロ藩にあるホンジョ村の潜伏キリシタンの存在を問題視するお上から、調査を任せれた主人公・鹿之助（しかのすけ）。つつましくも助け合って暮らすキリシタンへの弾圧を回避するため、全力で奔走する主人公と親友・犬べえの物語だ。

国の法度をものさしにして、そこからはみ出ている者はどんな事情も理由も酌量の余地なしと力を振りかざす役人。これに対して主人公たちはいろんな形で抗うのだが、ただ抵抗するのではない。潜伏しているキリシタンたちが、毎日どんなことを話し・考え、泣き笑いしながら暮らしているのか、そういう日常の何が・どのようにはみ出ているというのか、と鹿之助は自分の目線でとらえたことを自分の言葉で語り、お上に訴える。――観ているうちにだんだんと考える。これはいまを生きる私たちのお話でもあるのかも知れないと。

そういう大切なコアにふれながら、観客は、鹿之助と犬べえの丁々発止にクスッとしたりじーんとしたかと思うと、けなげな村人やクセのあるお役人、奔放な殿様などなどの人間模様や思惑に翻弄されながらぐいぐいお話に引き込まれていくのである。

この公演が、感染拡大の第五波のもと緊急事態宣言が発令されていたなかで準備され稽古をかさねてようやく実現されたものであることを思うと、作り手の熱意には感服するばかりだ。役者どうしの接触や、劇場空間を人で満たすことじたい制限して演劇を成立させなくてはならない、という大きな矛盾に向き合いながらの制作は、本当に大変だったのではないかと思う。それをもはねのけて完成した力作に拍手を送りたい。（栗の子）

# サークル見聞録

国際問題研究会　早稲田祭2021

## 研究展示
## 「パンデミック下の米中冷戦と世界の貧困・圧政を問う」

（11月6日 早稲田祭2021　早稲田キャンパス16号館307教室）

私たち国際問題研究会は、早稲田祭 2021 初日の 11/6、16 号館 307 教室において、研究展示「パンデミック下の米中冷戦と世界の貧困・圧政を問う」を、感染対策を十分に講じた上で、対面で開催しました。コロナ対策で入場者制限がおこなわれるなかでも、50 人を超える来場者の方に、私たちの研究展示を見ていただくことができました（同時にオンライン上でも私たちの研究を紹介する動画を配信）。

私たちは今年度、コロナ・パンデミックのもとで、米中両国が世界の覇権をめぐって、政治・軍事・経済のあらゆる面で対立を深めていることを研究してきました。今回の展示では、この米中の冷戦的対立が、いま台湾を焦点として激化していることに警鐘を鳴らすとともに、このただなかで日本の岸田政権がすすめている自衛隊 10 万人大演習や米戦闘機 F35B の爆買い、改憲の危険性を具体的に明らかにしました。また、イギリスのアジア「回帰」や、米軍のアフガニスタン撤退を機に存在感を増す中露主導のＳＣＯ（上海協力機構）、ミャンマー軍政による民衆大弾圧など、〈米中冷戦〉下で引き起こされている現代世界の激動にも切り込んできました。さらには、コロナ・パンデミックから 2 年の今日、ますます広がる世界の貧困・格差の問題もとりあげました。

実に 11 テーマ、計 17 枚におよぶ私たちの展示には、「米日と中国の双方の軍拡に反対しているのが新鮮だった」など、多くの感想・意見が来場者から寄せられ、会場内では私たちと来場者、または来場者の間で討論の輪が広がりました。

私たちの展示は、いま対中国の大軍拡と改憲を正当化する「中国脅威論」が岸田政権によって煽られ、これに批判的な意見がきわめて微弱である日本の論調に一石を投じるものになったのではないかと自負しています。今後も私たちは、〈米中冷戦〉の現代世界のもとで深まる戦争・貧困・圧政・環境破壊の問題を真に解決する理論の創造を目指して、さらに研究を進めていきたいと思います。

（国際問題研究会幹事会）

演奏会

# 早稲田大学マンドリン楽部
# 第206回定期演奏会

## 2021年12月17日(金)
## 18:00開場　18:30開演
練馬文化センター　大ホール

入場料:無料

YouTube Liveでの配信も同時に行います。

曲目

［第Ⅰ部］

《王宮の花火の音楽》より序曲　作曲/G. F. ヘンデル

イギリス民謡組曲　作曲/R. ヴォーン・ウィリアムズ

行進曲《威風堂々》第１番　作曲/E. エルガー

学生指揮者: 岩井良樹

［４年合奏］

ハンガリー舞曲第４番　作曲/J. ブラームス

［第Ⅱ部］

大学祝典序曲　作曲/J. ブラームス

楽劇《トリスタンとイゾルデ》より
〈イゾルデの愛の死〉　作曲/R. ワーグナー

歌劇《リエンツィ》より序曲　作曲/R. ワーグナー

学生指揮者：田口敦也

注意事項

開催形態は変更の可能性がございます。随時HPなどでご連絡致します。

演奏会に関するお問い合わせはマンドリン楽部広報（waseda_mandolin@yahoo.co.jp)まで。

演劇

# 早稲田大学演劇研究会企画公演
# 『蛮勇』

脱走囚を襲うのは刑務官じゃない―――

北の果て、小さな刑務所。いくら罪人たちといえども退屈に飽けば考えるコト。届かぬ星に手を伸ばす時、人々はそれを何と呼ぶ？　薄暗い雑居房で夢想する野蛮系コメディ。

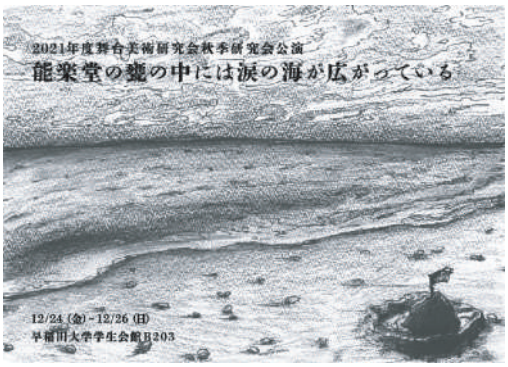
△上演形態　映像販売
△販売サイト　BOOTH
△販売期間　2021.11.20(土)～12.5(土)
△チケット料金　800円

△作・演出　小林未和
△出演　相本玲旺　時吉海希　中孝太
能見千秋　はる香　峰岸航生

お問い合わせ
△e-mail: gekiken.banyuu@gmail.com
△tel: 090-7061-6398(土井)

演劇

# 2021年度早稲田大学舞台美術研究会
# 秋季研究会公演
# 『能楽堂の甕の中には涙の海が広がっている』




【日時】12/24(金)～12/26(日)
【会場】早稲田大学学生会館B203

※詳細は後日発表いたします。